

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 「公共」は、人間と社会の在り方についての見方・考え方を働かせ、現実社会の諸課題の解決に向け、選択・判断の手掛かりとなる考え方や公共的な空間における基本的原理を活用して、多面的・多角的に考察したり構想したりする過程を重視する。

基礎的・基本的な概念や理論、考え方等を活用し、文章や資料を的確に読み解きながら考察する力を求める。

問題の作成に当たっては、現実社会の諸課題について理解したり考察したりするために必要な概念や知識に関わる問題、多様な資料を用いて考察する問題などを含めて検討する。

- 「倫理」は、人間としての在り方生き方についての見方・考え方を働かせ、現代の倫理的諸課題を見いだし、その解決に向け、多面的・多角的に考察したり、公正に判断し構想したりする過程を重視する。

「公共」での学習などを踏まえ、倫理に関する概念や理論についての理解を深め、それらを活用して、考察する力を求める。

問題の作成に当たっては、倫理的課題の解決に向け、先哲の思想に関する原典など多様な資料や他者との対話等を手掛かりにして、批判的に吟味して思索を深めたり、様々な立場から考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」第1問と同じ

第2問 『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」第4問と同じ

第3問 「幸福」に関する源流思想及び近現代思想についての課題探究を通して、「幸福」に関連する知識の定着度、倫理的課題についての思考力を測ることを狙って作問した。併せて、幸福はどのように実現されるのかについて考えさせ、資料読解と会話による議論を通じて思考力・判断力を深めてもらうことを目論んだ。

問1では、代表的な古代ギリシアの思想家の幸福に関するそれぞれの特徴的な考え方を理解しているかどうかを問うた。ヘレニズム時代の哲学者が選択肢の4分の3を占めたせいか、難易度が少し上がったようである。問2では、幸福に向けた具体的な生の在り方の一つとして、諸宗教の戒律や実践についての基本的な知識を問うた。受験者数が少なく、統計上の分析は困難であるが、受験者の解答は分かれ、やや難となった。ハラールとハラームについての正確な理解を求めたことが理由と考えられる。問3では、ルターにおける信仰と律法の関係について、資料から考察することを求めた問題である。資料自体は平易であるが、想定よりもかなり高い難易度となった。解答の傾向から、信仰のみというキーワードから資料を十分に読み込まずに解答したものと推定される。これは、設問の狙い通りであり、所期の成果を得られたと考える。問4では、幸福な生を巡る中国思想についての知識と判断力を問うた。標準的難易度に設定し、予想通りの結果が出た。問5では、カントの倫理思想についての理解力と判断力を問うた。教科書に掲載されている「格率」の意味を理解した上での問題だったが、狙い通りの難易度であった。問6では、理想的な社会についての古今の哲学者の思想を正しく理解しているかを、新形式によって問うた。語群から語句を選んで正答を作るという問題形式は、知識を文脈に適切な仕方で想起することができるかを識別しようとしたものだった。教科書記述が少ない思想家についての設問だったが、

この形式により難易度が標準的なものとなったという指摘があった。問7では、自己と他者の幸福が両立可能であるとする資料の読解を通して、他者との関係の中での幸福の在り方について問うた。やや難問となった。問8では、人間の生き方と幸福に影響を与えるものについての哲学者たちの考えについての正しい知識を問うた。解答の傾向から、識別力は高かったと判断できる。問9では、三つの場面と資料の読解を通じ、幸福を巡る多様な観点を具体的場面にあてはめる思考力・判断力を問うた。倫理用語の正確な理解が正否を分けた。オーソドックスな出題であり、難易度は標準的だった。

第3問全体としては適切な設問がそろっている。幸福という倫理における最重要課題の一つについて問うという問題の趣旨は読み取りやすく、出題意図は十分に果たされたと評価できる。

第4問 日本人の道德心の始原にある清明心に着目し、そこに見られる発想や倫理観が古代から近代までの様々な思想文化や現代生活の様々な側面にまで及んでいることを冒頭会話文と設問で示した。そして、それに関わる基本的知識を問いながら、その問題点、特徴などを確認しつつ、今後この日本人に特徴的な倫理観といかに付き合っていくべきかを考えてもらうことを狙いとした。時代や分野のバランス、文章量も無理がないよう配慮したことについては、成功したと思われる。また、応用力を問う大問5・6とは異なり、教科書の知識が定着しているかを判断できるよう意識して出題した。

問1は、清明心の基本的性格を問うものとして出題した。禊・祓など、清明心に関する事項を選択肢に並べることで、清明心をより総合的に理解してもらう狙いもあった。問2は、江戸時代の思想家における心を巡る言説について正しく理解していることを、様々な思想相互の差異を分析する能力とともに、確認しようとするものである。教科書の範囲で解答し得る知識問だったと考えている。問3は、武士における献身・奉公の道德の歴史的変化を正しく理解していることを確認しようとするものである。知識とともに、思想の展開を考えさせる意図は達成されたと考えている。問4は、修証一等を内容とする道元の資料を読み解き、それを彼の思想的特徴である只管打坐と同定する問題だった。鎌倉新仏教の他の祖師たちの専修の思想と区別できているかを問うた。資料には「禅」を示唆する文言はなかったが、結果的には易しい問題となった。問5は、高校生のレポートという形式で、近代自然主義文学・思想の背景にも清明心の伝統があることを理解し、その問題点を意識してもらいながら、島崎藤村と和辻哲郎の思想に関する教科書知識を問うた。和辻の「間柄的存在」という用語のみにひきずられた誤答が多かった。

第5問 情報技術と人間の関わりについての生徒たちの会話及びそれに関連する問題を通して、情報技術が社会の中で果たす役割や、人間とAIの類似点・相違点について知識をまとめながら考えさせた。それとともに、学んだ知識を踏まえて、AIとの共生についての様々な立場、多面的な考え方がありうることを提示しつつ、AIとのあるべき共生について多角的に考察し、公正に判断させることを目指した。

問1は、遺伝情報を用いた医療技術の倫理問題に関連する基本概念の知識を問うとともに、設問の文章の適切さを判断する思考力を問う出題であり、具体的にはヒトゲノムがどのような遺伝情報であるかの理解を問うた。難易度は高くはないものの、適切な出題であったと考えられる。問2は、医療・環境・情報技術の倫理問題に関連する基本概念の知識を問うとともに、設問の文章の適切さを判断する思考力を問う出題として、ビッグデータの活用について述べた文を選ばせた。作問者が想定した以上に、ビッグデータについて理解が進んでいることがうかがわれた。問3は、「心の理論」と呼ばれる能力の発達に関して、会話文と心理学の課題の内容を読み取る力（技術）及び基本的知識を問うものだった。会話文の中で具体的な心理学の課題（誤信念課題）を説明し、学校で習っていなくても解答できるように工夫したが、難易度は高かった。問4は、

「心の理論」と呼ばれる能力の発達及び認知発達に関する基本的な知識を基に、会話文を読み取り、発達段階に応じて獲得される能力を適切に判断する力を問うもので、易しい問題だった。問5は、A I との共生の在り方について、関連する様々な概念への理解を問うとともに、この問題について多面的・多角的な考え方があることへの理解、及び、どのような考え方にも懸念や反論がありうることへの理解を促すことを意図して出題した。やや複雑な出題形式であったが、難易度はおおよそ適切であったと考えられる。

第6問 文化的背景の異なる大学生が、学食のメニューをきっかけにして、文化的アイデンティティの多様性や集団への帰属意識、異文化理解をテーマとして対話する場面設定で、文化的多様性に関する基礎知識を問うとともに、実際に社会で生じている関連する倫理課題について、多面的・多角的に考察し、公正に判断できるかを問う内容である。受験者数の少なさから分析するのに十分な材料とは言えないが、受験者の倫理の学習成果を身近な問題へと結びつける趣旨は十分に実現できたと判断される。

問1は、レヴィ＝ストロースらが唱えた文化相対主義の理解に基づいた知識を問う問題。純粋な知識問題としては狙い通りの設問となった。問2は、会話文中の発言から、個人と共同体の関係について、コミュニタリアニズムの知識から推察する問題であったが、知識問題として難易度が高かった。問3は、学生の会話から、異文化理解と偏見について推論し、判断する設問である。文章が読解できれば、比較的素直に正解が論理的に導き出せる。問4は、実際に学校現場で生じている、文化的マイノリティの家庭とその子供への配慮を巡る問題について、現実思いを巡らせながら倫理的に思考し、判断することを求めた問いである。難易度はおおむね妥当だった。問5は、多文化共生に関して、意思決定の方法に関する文章を読解しながら、それを給食のメニュー決めという日常的な問題へと応用する思考力を問う問題。難易度は適当であり、狙い通りの設問となった。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見についての見解

第1問と第2問については『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」を参照

新課程の基本方針に沿って、教科書の基礎的な知識を問いつつ、併せて読解力や多角的・多面的な思考力と判断力を問う中で、高校生が主体的に問題を発見し、広く深く考えることができるような作問を心掛けた。そのために、リード文に代わる会話の場面を工夫し、知識に関しては時代と地域にまたがる横断的な設問を作り、教科書記載のない原典等の資料を積極的に取り上げた。大問で取り上げたテーマは、第3問の幸福と道徳、第4問の清明心と倫理思想、第5問の情報技術と人間、第6問の異文化理解であった。いずれも意欲的な課題を取り上げ、そこに多少なりともメッセージ性を込めた。難易度は全体として標準を目指した。

新課程になって初めての共通テストであったが、結果や反響から見てまずまずの出来であったと考えている。高等学校教員からも、テーマ設定、作問の狙い、難易度、表現など、全体として高評価を頂いた。

改善点を二つ挙げる。これは本試と同様であるが、四つの大問の全体に関して分量がやや多めであったことに関しては、読ませる資料を絞ることで、受験者にじっくり考えさせる余裕を確保する必要がある。また、知識問題と読解問題に関しては、前者の学習が不足し、後者が国語問題となって教科書を読まなくても解ける傾向にあると考えられ、今後は知識問題を織り込んだ思考問題を作る工夫が求められる。

4 まとめ

第1問と第2問については『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」を参照

今回は新課程に沿った初めての作問であり，六つの大問すべてに渡って試行錯誤を繰り返した。とりわけ，「公共」に関わる部分については，科目としても新たに導入されたものなので，苦心を重ねて作問した。幸い，結果としては，狙い通りとは言えないまでも，全体としてまずまずの出来の作問になった。今後は今回の作問の傾向とパターンが作問の基準となると考えるが，そのためには，基本的知識と組み合わせた思考力・判断力を問う設問の工夫や，異なる立場を反映させた複雑な設問方式の練度，偏りを避けつつメッセージ性を込めた意欲的なテーマ設定等，さらなる工夫が求められる。